西之内町地車新調
実行委員会通信

2021年
11月号

新調通信に関する御問い合わせ
西之内町公民館
072-444-7712

西之内町新調地車
彫刻の物語背景と紹介（７）
～毒饅頭疑惑～

霜が朝日にキラキラと溶けていく様子に清々しい一日の始まりを感じる初霜の候、西之内町の皆様におかれましては、ご清栄のことと存じ上げます。

今回も新調地車の彫り物の場面について少しご紹介します。大坂の陣に至る過程で豊臣秀頼と徳川家康の二条城の会見があります。慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原合戦後、徳川家康は豊臣秀頼の優位に立ちました。とはいえ、形式的には両者の立場は拮抗していたので、家康は何とかして秀頼よりも上に立ちたいと考えた。そのため、加藤清正が尽力して実現したのが、二条城の会見です。

慶長十六年（一六一一）三月二八日、二条城において家康と秀頼との面会が行われました。ここに至るまで両者の面会はなかなか叶わず、加藤清正ら秀吉恩顧の大名らが秀頼の説得を行うことで、ようやく実現したのであります。家康にとっては、実に四年ぶりの上洛でした。

秀頼が二条城に到着すると、家康は自ら庭中に出て丁重に迎え入れました。『当代記』に記されているとおり、家康は対等の立場で礼儀を行うよう促しましたが、秀頼はこれを固辞しました。そして、家康が御成りの間に上がると、秀頼は先に礼を行ったのであります。先に礼をしたということは、秀頼が家康を上位とみなしたからでしょう。これにより、家康が秀頼の上位に立ったのであります。この点については、一般的に家康が秀頼を二条城に呼び出し、挨拶を強要して臣従化を行ったという説があります。豊臣家にとっては、大きな屈辱でありました。

豊臣秀頼公

いろいろな古文書から研究されているように、家康の丁寧な応対ぶりから、秀頼に臣従を強制したとは考えがたいところがあります。また、挨拶が秀頼の自発的な行為であり、①秀頼が家康の孫婿であり②朝廷官位においても秀頼が下位であるため、家康に対する謙譲の礼であって、臣従の礼ではないという考え方もありますが、これは首肯しがたいところです。この説では、「謙譲の礼」と「臣従の礼」を使い分けていると考えられています。

では、この会見の本質はなんであるでしょうか。会見は家康が秀頼を二条城に迎えて挨拶を行わせたことにより、天下に徳川公儀が豊臣公儀に優越することを知らしめる儀式であったという説があり、これが妥当であると考えられます。

この会見は家康により巧妙に仕組まれたものであり、自然な流れの中で豊臣家を下位に位置付けようとしたのであります。要するに、招かれた秀頼は、自ら挨拶するよう仕組まれたのでした。

一見して家康は秀頼に配慮を示しているように思えますが、秀頼は「対等の立場で」という家康の提案を受け入れるわけにはいきませんでした。その理由は官位などの立場は、家康のほうが上に位置していたからであります。家康もその点は織り込み済みであったに違いないはずです。

やはりこの点において、老獪だった家康ならではと思うところです。

自ら強制的に命じるのではなく、自発的に行うように仕向けるこうした権力者としての狡猾さが家康の持ち味であります。

家康からすれば、形はどうであれ、秀頼を二条城に出向かせ、自分に挨拶をさせることに大きな意味がありました。こうして秀頼は、家康の下位に位置付けられ、それが天下に知れ渡ったのであります。

二条城の会見では、別の逸話もあります。会見場で秀頼を護衛した加藤清正が急死します。それを受けて、まことしやかな「毒饅頭暗殺説」が巷間ささやかれ、後に歌舞伎の題材にもなっております。

それによると、家康は会見場において秀頼の毒殺を図り、意を受けた腹心の平岩親吉は遅効性の毒のついた針を刺した饅頭を自ら毒味した上で秀頼に勧めましたが、それを察した清正は自ら毒饅頭を食べてしまい自分の命と引き換えに秀頼を守ったという物語です。

史実においても清正と平岩は会見後に死去しています。しかし、清正が死去したのは同年六月二十四日であり、平岩の死去は十二月三十日であることから、同じ毒の影響にしてはあまりにも差があること、またこのような遅効性の毒は知られていないことから、歌舞伎の内容は俗説と見られていますが、後日談として語り継がれるには、十分な憶測が出来る逸話であります。

今回の新調だんじりでも、憶測の中での場面でありますが、この逸話をもとに二条城の人間模様を彫刻という鑿の世界観で表現されております。また、その他に大変な細かいところまで表現しております。ご期待ください。

二条城　大広間

新調地車の彫り物 進捗報告

～擦出し受け、枡組の荒彫り～

十一月に入り摺出し受け部および枡組の荒彫りに着手しております。摺出し受け部では題目の『難波戦記』のうち、鳴野口の合戦の一部を表現しております

当時の最新兵器による合戦の様子を巧みに表現しており、『難波戦記』における大坂方の苦悩がうかがえる場面となっております。

枡組は、だんじりの個性が出る部分でもあり、現だんじりの面影を残すことから縦割り付の配置で計画しております。その中でも尾垂木は、特徴のある仕様で進めております。

仕上げ作業では、腰周りの小連子を手掛けており、人物の家紋など細部にわたり丁寧に仕上げをおこなっております。また、紐と呼ばれる部分の模様にも手がけております。幾何学模様を丁寧に一つ一つ人の手で仕上げていくのは、根気と労力が必要な作業であり、工房で見ているだけでも肩が凝る作業であると実感します。

来月からは、ようやく松良の部分の下絵に着手する予定です。部材は大きく、物語の人物の配置構成など難しい部分でもあり、山本師との打合せを何度も重ねて進めております。

仕上がった武者の甲冑

草擦、弦走にも細かい模様を施しております

新調委員の独り言

山本師の彫刻も順調に進んでおり、植山工務店さんとはだんじり本体の打合せを進めております。泉州地方では、趣向を凝らしただんじりが多数あり、委員会の中でも他所ではないものを取り入れようと検討しております。幟などの装飾品についても順調に進んでおり、完成が待ち遠しいところです。

今年も、他所ではだんじりの入魂式や昇魂式が執り行われました。西之内町の新調委員も新調だんじりに関することが一つ一つ進んでいく中で、ゴールに向かって、かんばっております。今後ともご支援くださいますよう、宜しくお願い申し上げます。

西之内町地車新調実行委員会　検索